

エコトーンとしての潟湖における 伝統的生業活動と「コモンズ」

近世～近代の八郎潟の生態系と生物資源の利用をめぐって

Traditional Activities and the "Commons" in an Ecotone Lagoon

佐野静代

はじめに—問題の所在と研究目的—

①研究方法と対象地域

②八郎潟の自然条件

③八郎潟における伝統的生業活動①——漁撈と水鳥獵

④八郎潟における伝統的生業活動②——水生植物の利用形態

⑤湖の資源をめぐる「コモンズ」と共同体的規制

⑥考察——人間を含んだ生態系としての水辺—

おわりに

【論文要旨】

近年、水辺エコトーンの生態学的機能が再評価されつつあるが、生物多様性の高い水辺空間は、人間にとっても「生物資源の豊富な場所」を意味していたはずである。本研究の目的は、このような水辺エコトーンにおける人間の伝統的生業活動・資源利用の実態と、その生態系への影響について検証し、「人間を含んだ水辺の生態系」の全体像を明らかにすることである。

本稿では、国内最大の潟湖であった秋田県八郎潟をフィールドとして、潟湖によって生み出された水生植物・魚類・鳥類などの豊富な生物相と、沿岸住民による近世以来のその多様な利用形態について分析した。少なくとも明治期までは、重要な生物資源にはいずれも「コモンズ」として村落共同体の強い規制がかかっており、持続的かつ公平な資源の利用・管理が意識されていたことがわかった。また、水辺エコトーンとしての潟湖には、このような人間の生業活動を含み込んだ生態系が成り立っており、人間が潟湖を多様に利用することが、全体として一つの循環システムを形成していたことを明らかにした。なお、近代以降の空間利用の集約化と軌を一にして、「コモンズ」の崩壊が認められ、ヨシ帯の破壊や資源の過剰採取の問題が顕れるなどを指摘した。

潟湖という水辺エコトーンが、人間活動とのバランスの上に保たれた「二次的な自然」であるならば、今後の潟湖の保全には、人間の手を排すことではなく、むしろ人間との適度な関わりを保っていくことが必要となる。各地で蓄積してきた潟湖利用の民俗文化を再検証することは、人間がどの程度まで手を触れてよいのか、今後の潟湖の「保全と賢明な利用」に一つの基準を供するものと考える。